

第177回 令和8年2月17日（火）

「实在論と観念論について」

理解に時間がかかる概念ですが、「世界」とは一体何だろうという話です。

实在論とはあなたが生まれてくる前から世界があって、死んだ直後にも世界は存在し続けているという考え方です。またあなたが見ている世界以外に、見えないところでも世界は存在しています。

この考え方は当たり前だと思う人が多いはずですが。日本で暮らしている間にも地球の裏側のブラジルでも人々は暮らしているし、南極にも北極にも生物はいるわけです。

インドなど一部の国では観念論と言って、世界は自分の意識の中にあるという考え方があります。生まれてくる前に世界はあったのか、死んでからも世界があるのか。そもそも自分が死ぬことと世界が消えることの区別が自分でつけられるのか。

映画やアニメではセットの中でつくられた世界が展開しているわけで、観客であるあなたがそれを見えています。セット以外のところでセットを作って物語を進める必要はありません。見ているあなたもセット以外のところで別のセットがあって物語が進んでいるとは思わないはずです。

世界が自分の自我の中にあると考えることでコントロールすることが楽になります。实在論では世界と自我は別のものですから自然であれ、人間であれ、なかなかコントロールすることはできません。そのため日々動かしようのないことで悩むことが多くなります。

自我と世界が一体であると考えすることで、何が起きても自分の考え次第で何とでもなると言うことができます。自分が見ている世界は自分の脳を映写機として映しているスクリーンのようなものだ、辛いことがあっても必ず乗り越えることができる、なぜならそれは自分が見ている映画のようなものだからとすることができます。

「神は人間に乗り越えられる試練しか与えない」と言われます。神を信じる人からすれば辛いことはすべて自分を成長させるために与えられた課題のようなものであるということです。いつか必ず乗り越えられるから今はそれに耐えようという考え方につながっています。

現実で考えれば世界は自分と別のところでも動いているし、人生の課題も偶然にできていることも多々あるかと思います。意味をつけることで課題にポジティブに向き合おうとすることができるのかもしれない。

人生で大きな試練は何度か訪れます。それで自分を不幸だとか、運がないとか思う必要はないと考えています。試練があることは生きている証です。